

学校だより

学校だより 6月号
令和4年5月31日
発行者 外日角小学校
TEL 283-0040

子どもの心を読む

校長 稲垣 一郎

ちょっぴり緊張と不安を感じながら入学した1年生は、もうすっかり外日角小学校の雰囲気にも慣れてきました。4月には、1年生の下足箱や廊下・教室に6年生の姿がよく見られました。生活に慣れていない1年生が困らないように、進んで支援をしてくださいました。やさしく手を差し伸べる6年生。微笑ましい風景であるとともに、6年生にとっては最上級生としての自分を自覚する最初の時でもあります。

1年生にタブレットの使い方を教える6年生



学校ではどの学年でも、大きな学校行事から小さな日常の一コマまで様々な活動・体験があります。その一つ一つが子どもたちの心の成長に大切な糧となっています。うまくいくことも、失敗することもあるでしょうが、その時々の子どもの気持ちや行動を認め、価値づけあげることが、近くにいる大人の役割だと思えます。

20年ほど前、私が担任をしていたクラスに、思ったらずぐに行動をしてしまう児童がいました。その日、私は郡市内の大勢の先生方の前で研究授業を行っていました。理科の授業で実験の話をしているときでした。突然、その子が立ち上がり教卓の上の物を動かしました。「どうしたの？席に戻って。」私の言葉に一度は座った児童でしたが、再度立ち上がると教卓に歩み寄り、教卓上のピーカーやマッチなどを動かしています。混乱した私は、その子を抱えて席に無理やり座らせました。授業が終わり、参観者が出て行った教室に一人の先生が残りました。私に歩み寄ると「先生、先生は机の上を片付けて前を向きましょうと指示を出しましたよね。だからあの子は、先生の教卓の上を片付けようとしていたのではないですか。きっとそうですよ。」自分の授業に精一杯だった私には、その児童の行動は「訳のわからない行動」にしか見えませんでした。また、宿題を全くしてこない児童に対して、厳しく指導したことがありました。後でわかったことですが、自宅に帰ってから弟と妹の世話を寝るまでして、宿題どころではない状態だったということもありました。児童の本当の心情や現実を知らずに、自分本位で一方的な受け止めをし、決めつけてしまった自分がとても恥ずかしく、ずっと忘れられない出来事となっています。どんな行動でも、その子なりの理由や訳があるということです。そこを大切に、その子にとってより良い対応をしていかないと本当の教師にはなれないと思えました。

学校生活では様々な出来事が起こります。児童・教員・保護者それぞれの見解や思いに、ズレが生じることはないとは言えません。その時に自分の経験や価値観だけで判断するのではなく、なぜそうなったのか、その真意をよく話し合い、認めたり褒めたり、時には指導したりする必要があります。そのためにも保護者の皆様と学校の教職員はいつも手を携え、子どもたちの成長のために協力し合う必要があると思います。今後ともよろしくお願ひします。